生活支援体制整備通信
杉並ぐるる
つなぐ ひろがる ささえる
2019年11月発行 vol.14

今号の主な内容

○「楽しそう」「面白そう」が地域の人と人をつなぐ
—コミュニティスペース「まちナカ・コミュニティ西荻みなみ」……1～2面
○地域で展開される支えあいの活動へ……3～4面
—第2層協議体が動き出しています。
—第2層協議体から生まれた課題解決プロジェクト 高円寺南と阿佐谷

「楽しそう」「面白そう」が地域の人と人をつなぐ
コミュニティスペース「まちナカ・コミュニティ西荻みなみ」

JR西荻窪駅の南側、神明通りの商店街の中ほどにある「まちナカ・コミュニティ西荻みなみ」（以下「西荻みなみ」）は、地域住民が主体となって立ち上げたコミュニティスペースで、運営や企画も住民によって担われています。その活動は、昨年10月のオープン以来、新聞やラジオで取り上げられるなど注目を集めてきました。これまでの取り組みや地域の変化などを中核となるメンバーに語ってもらい、住民主体の地域づくりのヒントを探りました。

人々を引きつける磁石のような場

主催イベントのひとつ「まも先生の寺子屋デー」の時間に西荻みなみを訪ねました。小学生の男の子たち数人がテーブルを囲んでプログラミングや折り紙など、思い思いのことに熱中しています。彼らの間に入って、親身にアドバイスをするのは、地元出身の大学院生、まも先生こと多々納守（たたのまもる）さん。「それぞれがやりたいことをして過ごす時間にしています。予約なしに誰が来てもOK。大人が携帯電話の使い方を聞きに来ることもあります」。青少年委員※として活動する母を見て、自分も地域のために何かしたいと考えるようになったとか。スケジュールをやりくりして、毎月2回、夕方の2時間開催しています。

別のテーブルでは、大人たちが手仕事をしていて、時々、子どもたちのテーブルにやってきては声を掛けています。いろいろな世代の人が居合わせて、自然に言葉を交わす場所になっているようです。

子どもたちに慕われる「まも先生」

商店街に面した全面ガラス張りの向こうから、しばしば通行人が中を覗き込んでいます。「何してるんだろう?って皆さん気になるみたい。でも、自分からは入りにくいようですから、こちらから外に出て声を掛けています」と語るのは、事務局長の望月美智子さん。「新聞を持参して、なるべくここで過ごすようにしているんですけど、次々と人が来るから読めやしません」と笑います。この場所の面白そうな雰囲気が、街をゆく人を引き寄せる磁力となっているのでしょう。

会場整備に協力者が駆け付け

昨年3月、この場所で営業していたスーパーマーケットが店仕舞いしました。「空いた場所を地域のために活用できないか」と考えたのは、近くの区民集会所できずなサロンを運営していた綾部庄一さん（西荻みなみ代表理事）。スーパーのオーナーに直談判したところ、オーナーの理解もあって安く借りられることになりました。綾部さんらは集会所で5年間きずなサロンを運営してきましたが、集会所の利用には抽選があり、必ずしも場所が確保できるわけではありません。きずなサロン参加者が60人にまで増えたため、確実に使える会場が必要でした。

賃貸料を払いながら会場を継続的に運営しつつ、地域のために活かしていくにはどうしたらいいか。きずなサロンの有志は「西荻の夢を語る会」を立ち上げ、10年先を見据えた検討を始めました。並行して、スーパー閉業

次々アイデアが飛び出す「わいわいガヤガヤ会議」

後のがらんとした部屋で、近隣町会の会長を招いて懇親会を開き、場所への関心と理解を求めたそうです。

夏に賃貸契約を結ぶと、町会や商店会で声を掛け合い集まって、皆で床を磨いたり、ペンキを塗ったりして内装を整えました。経費を抑えるためではありましたが、一緒に汗を流すことで、協力者たちは場所に愛着を持ち、夢が膨らんだといいます。レンタルボックスの棚を作ったり、網戸の網を張ってくれたり、腕に覚えのある人たちが引き受けてくれました。「自分たちが一生懸命やっていると、手伝わなきゃ、と思ってくれる人が現れて救ってくれるんです」と総括プロデューサーの秋山成子さんは振り返ります。

やりたい人が主体的に動く

西荻みなみで何をするかは、誰でも参加してやりたいことが言える、月に一度の「わいわいガヤガヤ会議」で決めています。組織をピラミッド型にしていないから、やりたい人が主体的に動けるとか。「自由にものが言えると、いろいろな人からアイデアが次々と出てくるんですよ。会議で聞いた時は『どうかな?』と思ったような企画でもやってみたら、大盛況だったりします」（綾部さん）。「お誕生日会」がその好例。地域の方も参加して似顔絵やどじょうすくいなどでにぎやかにお祝い。ほかにも、美容マッサージなどを専門家から学べる「ときめきサロン」、ボランティアの演奏に合わせてみんなで歌う「昼下がりのうた声喫茶」など、バラエティに富んだ好企画が数々。また、すぎなみ大人塾の卒業生を講師に習字教室を開いたり、東京女子大学と共同で多国籍交流ゼミを開いたりするなど、地域人材の掘り起こし、地域資源の活用にも意欲的に取り組んでいます。

趣向を凝らした「昼下がりのうた声喫茶」

任意団体「西荻みなみ」は、これら主催・共催事業のほかに、地域で活動する団体への場所の時間貸しや、作品を展示・販売できるレンタルボックスの事業で収益を上げています。キャビネットや棚、冷蔵庫など、多くの備品は閉鎖する施設から調達。寄付、会員からの会費、杉並区社会福祉協議会からの助成金で、支出をカバーし、どうにか、立ち上げ時に募った出資金返却の開始にまで漕ぎつけました。

高齢者が生き生き、町会も積極的に

この1年の活動を振り返り、「最初は、本当にコミュニティスペースが必要なの?という声を耳にしたこともありました。でも、活動を重ねるうちに、徐々に理解者が増えていきました。何よりうれしいのは、活き活きとした顔つきの高齢者が増えたことです」（望月さん）。西荻窪町会長でもある秋山さんは、活動に関わるうちに町会役員の意識が変わったといいます。「『町会ももっと地域のことを考えていかなくては』といった積極的な声がこれまで以上に聞かれるようになりました。」さらに、「防犯・防災の訓練など、一つの町会だけでは人手が不足することも、この場所を拠点に、近隣の町会が協同で取り組める」と秋山さんの期待は高まります。

左から望月美智子さん、綾部庄一さん、秋山成子さん

「今後注力したいのは、後継者の育成」と綾部さんは強調します。「働き盛りの世代にも地域に関心を持ってもらいたいし、せっかく町会の役員になってくれた人には、もっといろいろな場で活躍できるように、地域のことを学び直す機会を提供したい」。西荻みなみで生まれた各事業が地域に拡散していくための仕掛け作りにも取り組むとのこと。

地域の人々の「こんなことしてみたい!」という気持ちをパワーに、西荻みなみは人と人をつないでいきます。そして、多様な世代、多様な人々が出会い、活動する居場所となって、地域に元気をもたらしていくでしょう。

※青少年委員とは、青少年教育の振興のため、家庭・地域・学校をつなぐパイプ役となり、地域の教育力向上の役割を担う非常勤の公務員です。

地域で展開される支えあいの活動へ

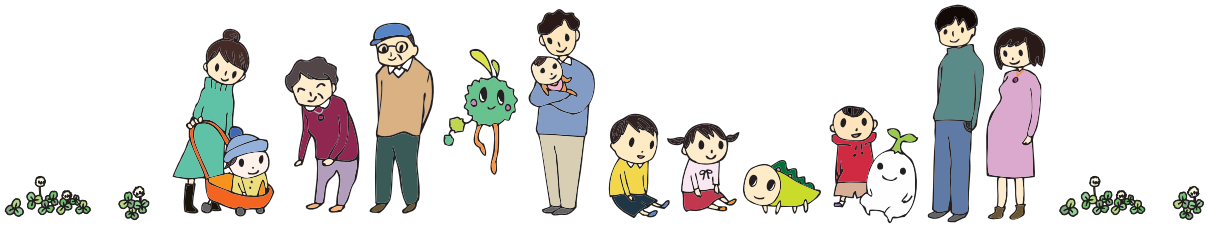
第2層協議体が動き出しています。

高齢になっても住み慣れた地域で自分らしい生活を継続できる杉並区の実現に向け、介護保険などの制度的サービスだけでなく、住民間のちょっとした手助け等の生活支援や、ご近所の交流が図れる集いの場づくりなど、地域で支えあう仕組みづくりが必要となっています。

こうした、お互いに支えあう仕組みづくりを各地域で推進するのが、生活支援体制整備事業の取り組みです。ケア24（地域包括支援センター）の担当区域である各日常生活圏域を単位として、各地域の実情にあった課題解決に取り組む体制（第2層）と、区全域を対象として、各地域の取り組みを円滑に進めたり、地域では解決できない全区的な課題について検討する体制（第1層）があります。

第1層、第2層のそれぞれに、生活支援コーディネーターと協議体を設置しています。

第2層協議体では、地域の活動者や団体などが集まり、既に地域にある支えあい活動など地域の情報を共有したり、将来に向けて「自分たちのまちをどのような地域にしたいか」などを話し合い、その地域ならではの支えあいの仕組みづくりの推進を目指します。



第2層協議体から生まれた課題解決プロジェクト ― 高円寺南と阿佐谷

第2層協議体（以下「協議体」）は区内各地で立ち上がっており、協議体の話し合いから生まれた具体的なプロジェクトが動き出しています。その中から、高円寺南の「月曜日カフェ」と阿佐谷の「ふらり赤い椅子」の2つを取り上げました。いずれも以前から地域住民の皆さんが課題と感じていたことを解決する取り組みです。

男性の居場所「月曜日カフェ」

高円寺南で協議体「高円寺南会（仮）」が立ち上がったのは昨年暮れのこと。高円寺南氷川町会の町会長、住民、あんしん協力員、民生委員、いきいきクラブの会長、歯科医、デイサービス相談員らがメンバー。町会長つながりで高円寺緑ヶ丘町会長（当時）と馬橋二丁目北自治会長も協力参加しました。

地域の困り事などについて話し合う中で、「男性の居場所がない」というかねてからの課題が浮上しました。高齢者が集うゆうゆう館などとは別に、「気軽に立ち寄れるコミュニティカフェ」があるといい…という思いです。

会のメンバーが利用できそうな場所の情報を持ち寄って検討していると、“渡りに船”です。近くの寺務所を借りて「水曜日カフェ」を開いていた濱田才聖（はまださいせい）さん（P4写真左から2番目）が、スナックを改装したAtariギャラリーカフェに場所を移すとのこと。それを知った高円寺南氷川町会の藤崎明会長（P4同右から3番目）がケア24高円寺につないだところ、濱田さんは“男の居場所”づくりに賛同し、「水曜日カフェ」とは別に「月曜日カフェ」としてオープンすることになったものです。カフェ経営者の濱田さんは民生委員でもあります。「民生委員になってから地域交流会を始めたいと思っていた」と明かします。

「月曜日カフェ」

「月曜日カフェ」は高円寺南三丁目のエトアール通りの一画にあり、毎週月曜日の午後2時から4時までオープンしています。協力金（お茶代）は200円。人数がそろうと麻雀をすることも。時々、高円寺緑ヶ丘町会長（当時）や馬橋二丁目北自治会長、地元のウォーキング団体（KMG高円寺）主催者らが“応援”に来ます。「地域の人が自然と集まれる、それでいて皆で楽しめるイベントもできたら」。それが濱田さんの願いです。濱田さんは近く、「月曜日カフェ」と「水曜日カフェ」を合体し、「木曜日カフェ」として再スタートさせる予定です。

カフェの濱田さんと協力者の町会長ら

ケア24高円寺の長谷部さんは「協議体といっても“会議”の場だけでなく、立ち話などで話題に出し続けることでネットワークが広がっていった。その結果が形になったのだと思います。」と話します。地域の草の根の人間関係があったからこそ、新たに集いの場を作らなくても既存の地域資源を活かして課題解決につながったと言えるでしょう。

街中に小さなオアシス「ふらり赤い椅子」

ケア24阿佐谷のエリアでも民生委員、あんしん協力員、町会、介護事業所などの関係者が年1、2回集まる「地域懇談会」があります。その企画・運営をするメンバーを中心に協議体が動きだしました。話し合いで浮上した地域の課題は「街中の休憩所」と「往来が激しいスーパー前の歩行者安全」の2つ。その課題解決を目指す協議体に今年6月、「ふらり阿佐谷」という愛称が付きました。「一人でもふらり出てみたくなる街、阿佐谷であってほしい」という思いを込めています。

2つの課題ともチームが立ち上がり、取り組みが進んでいます。リーダー役はあんしん協力員の佐藤久夫さん。「阿佐谷は便利な街だが、高齢者が買い物や通院で商店街や病院に行くまでが大変」と指摘します。2つの課題に共通する背景です。そのうち「街中の休憩所」は「外出先でひと休みできる場所がほしい」という住民の声を拾ったもので、「ふらり赤い椅子」として進行中です。

ペンキ塗りも自分たちで

「椅子集めや置き場所をどうする?」「椅子に塗るペンキ代は?」…。立ちはだかる壁にプロジェクトはなかなか進みません。今年6月に女性3人が担当に決まると「やるしかない。歩きながら考えましょう」と腹をくくりました。先進例である吉祥寺の「赤い椅子プロジェクト」を視察する一方、佐藤さんらが椅子集めに奔走。10月には11脚の椅子が集まり、うち8脚に赤ペンキを塗るまでになりました。椅子の置き場所も阿佐谷パールセンター商店街の和菓子屋など4カ所が協力してくれることになりました。椅子は1カ所に2脚ずつ置きます。「せめて10カ所には置きたい」がチームの当面の目標です。

「歩行者安全」への取り組みは、阿佐ヶ谷駅近くの大手スーパー前の歩道が狭く、自転車と歩行者の接触・衝突事故が起きている状況を改善しようというもの。歩道を広げるには駐輪場の確保など交渉先はスーパーだけでなく警察や都・区などに及び、一筋縄ではいきません。それでも「ふらり阿佐谷」のメンバーで安全な自転車走行を訴えるビラ配りをするなど、地道な活動を展開しています。

「ふらり阿佐谷」の皆さん

やさしい街とするために何が必要か。「ふらり阿佐谷」のメンバーが考え、体を動かし、たどり着いた「ふらり赤い椅子」と「歩行者安全」の取り組みは、訪れる人に安全と安心と心遣いを感じてもらえる活動となるでしょう。「ふらり赤い椅子」がちょっとした交流の場となることを期待します。

〈編集・発行〉杉並区保健福祉部高齢者在宅支援課　〒166-8570杉並区阿佐谷南1-15-1　電話03-3312-2111（代表）内線3223
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。